遊びと子ども

―十七世紀オランダの絵画と記録から―

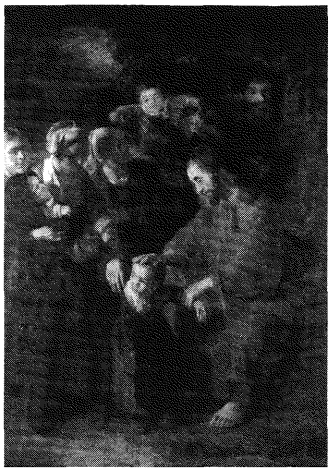
小林頼子

十七世紀のオランダで、子どもをめぐる画像に、小さいけれど興味深い一つの変化が起きる。「エリシャを嘲る子どもたち」という主題がほとんど描かれなくなり、代わって「子どもを祝福するイエス」という主題が取り上げられるようになるのである。

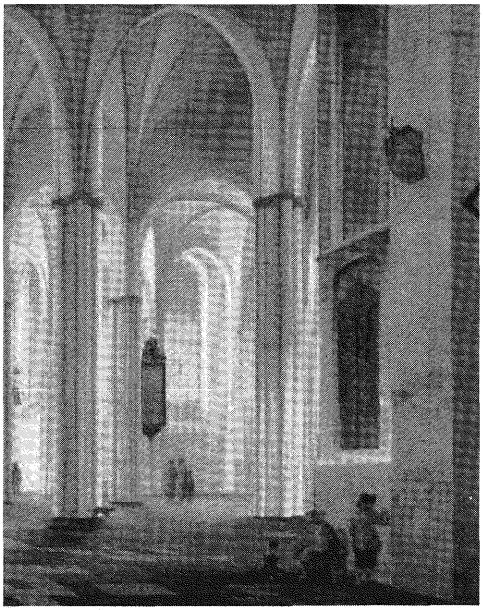
前者は旧約聖書中の物語に典拠がある。イスラエルの預言者エリヤの弟子エリシャがベテルの町に着いたとき、小さい子どもたちが、道を上ってくるエリシャを「はげ頭、上って行け、はげ頭、上って行け」と嘲る。これに怒ったエリシャが主の名によって彼らを呪うと、森から二頭の熊が出てきて、子どもたちのうちの四十二人を引き裂く（列王紀下二章二三―二五節）。現存作品の多くは、はげ頭のエリシャと熊に襲われる子どもたちの姿を描いているが、ここでは風俗画と見紛うルロフ・ファン・ゼイル作品を図示しておこう（図1）。エリシャの姿はなく、主役は、もっぱら舌を出し、指さし、大人を馬鹿にする憎たらしい子どもたちである。

一方、「子どもを祝福するイエス」は、福音書に記さ

1　ファン・ゼイル《エリシャを嘲る子どもたち》、17世紀前半、個人蔵

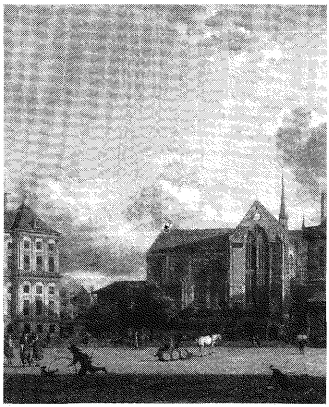


2　マース《子どもを祝福するイエス》、1652－53、ロンドン、ナショナル・ギャラリー



3　（上）サーンレダム《ユトレヒトのビュール教会》、1644、ロンドン、ナショナル・ギャラリー

4　フィッセル《寓意人形》（1614）より



5　（右）ファン・デル・ヘイデン《アムステルダムのダム広場》、1668、アムステルダム、国立歴史博物館

れたエピソードに基づいている。イエスに祝福してもらおうと人々が子どもを連れてやってくるが、弟子たちがそれを押しとどめる。イエスはそれを見て、「子供たちを来させなさい……天の国はこのような者たちのものである」と弟子たちを諌める（マタイ伝一九章一三―一五節）。幼い子どもたちにも信仰の力を認めるルターの考え方に応じて注目され始めた主題だが、絵画化に際しては、たいていイエスの前に立つ子どもたちのあどけなさが強調される（図2）。

憎たらしい子ども像からかわいらしい子ども像へ。十七世紀におけるこの変化は、一体、何を物語るのか。以下では、この変化の背景を、子どもの遊びに対する十七世紀オランダの考え方と関連させながら、掘り下げてみたいと思う[1]。

十七世紀のオランダの子どもは、学校にずいぶんと長く留め置かれた。子どもたちは、七歳に達すると週に六日、夏はなんと朝六時に登校し、下校するのはようやく夕方七時であった。その間、休み時間は十一―十三時と十六―十七時の、合計三時間だけ。食事の時間を除けば、休み時間はほんのひと時。その上、夏休みはたった二週間ほど。初等教育が普及した十七世紀オランダの子どもたちは、ほとんど学校漬けの毎日を送っていたのである[2]。

ならば、通りで遊ぶ子どもの姿なぞほとんどなかったかといえば、意外にもそうではなかったようだ。たとえば、アムステルダムでは一六五一年に、子どもの遊びのおかげでガラスが割れ、善良なる市民生活が脅かされたと、住民たちが苦情を申し立てている。一六六二年の文書には、子どもたちのボール遊びや小石投げで窓ガラスが割れ、二人の人間が失明したと記されている。一六六七年には、通りで子どもが一日じゅう騒いでいるとの記録もある。こうした悪童ぶりは外国人旅行者の目にもとまり、たとえばあるドイツ人旅行者は、一六一四年に、大声を出して通りを走り回る子どもを目撃したと書いている[3]。

子どもたちは、教会にだって侵入して遊んだ。当局は、教会内で遊んではならない、と繰り返し禁令を出したが、ほとんど効き目がなかったようだ。その無秩序な様子は、一六一四年にオランダの地方都市ブレダを訪れたあるイギリス人旅行者の日記の記述、「子どもたちは教会の中に座り込み、遊び、ありとあらゆる悪ふざけをし、金切り声を上げている」に明らかである[4]。実際、十七世紀オランダで好んで描かれた教会画室内画には、床に座り込んで骨お手玉で遊ぶ子ども、追いかけっこをする子ども、さらには柱にいたずら描きをする子どもの姿がまま見られる。たとえばユトレヒトの教区教会ビュール・ケルクの内部を描いたピーテル・サーンレダムの作品（図3）には、白い大きな柱にいたずら描きをする少年の後ろ姿が右前方に登場する。少年は、赤チョークで四人の男を乗せて進む馬をちょうど描き終わったところだ。面白いことに、奥の方にいる大人は子どものこのいたずらにほとんど関心を払っていない。ほとんどの旅行者がオランダの親は子どもに甘いと書いているが、事実、そのとおりだったようだ。

しかし、こんなふうにお目こぼしされていたとはいえ、子どもの遊びの評判は必ずしもよくはなかった。十七世紀当時の書簡や日記には、だから、自分あるいは自分の子どもがいかに遊びを避けて有意義な子ども時代を送ったかを強調するくだりが目立って多い。たとえば当代きってのインテリ女性アンナ・マーリア・スヒュールマンは、遊びを「おそろしき愚行」と呼び、他の子どもたちと遊んで時間を浪費しなくてよかったと、自らの子ども時代を誇らしげに回想する。一方、ヒューベルト・ポートなる人物は、子ども時代の遊びが結局は争いのうちに終わったことを後悔の念とともに記している[5]。

先ほどのサーンレダムの作品中のいたずら描きも、実は、単なる罪のない子どものいたずらで済まないところがある。少年が柱に描いたのは、当時ゴッコ遊びにもなっていたフランスの中世の武勇譚『モントーバンのルノー』の一場面で[6]、馬はバイヤール、乗っている四人は

カール大帝に敵対し、苦難の道を歩むルノーとその兄弟である。妖力をもつ馬のバイヤールは、ルノーに飼いならされて、やがて四人を助ける。一方、このいたずら描き少年の傍らには、もう一人の少年が座っていて、こちらは犬にチンチンを仕込んでいる様子だ。犬の調教は、古来、しつけを暗示する行為と見なされてきた。子どもの肖像画に添えられたときは、だから、しつけのよさをほのめかすモティーフとなる[7]。

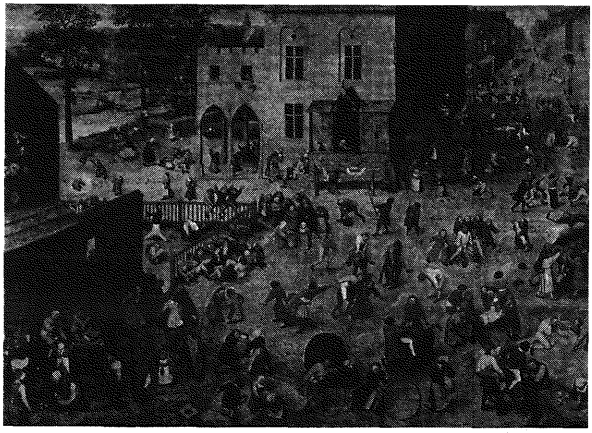
野生のバイヤールと飼いならされたバイヤール、そしていたずら描きをする少年と犬の調教をする少年。それぞれが提示しているのは、教育（しつけ）のビフォー・アフターであり、そうであってみれば、遊びは明らかに教育（しつけ）によって乗り越えられるべき負の意味を担っていることになる。サーンレダムはいたずら描きをする少年の姿を通じて、遊びの否定的側面をほのめかしているのである。

ルーメル・フィッセルも子どもの遊びにいささか批判的である。それは、輪遊びをする子どもの画像に、「何の役にも立たないことを懸命にやるより、じっとしている方がましだ」という解説をつけているところからも明らかである（図4）[8]。大人の冷え冷えした視線が子どもの遊びに注がれているのが感じられる。ヤン・ファン・デル・ヘイデンが、働く大人と輪遊びをする子どもの姿をアムステルダムの新教会前の広場に対比的に描き込んだのも、同じような考えによるものだろう（図5）。遊びは退けるべき怠惰であり、労働のみが神に仕えることだったのだ。

子どもの遊びの描写には、もう一つ、大人の愚行を先取りする狂気の世界という含みもあった。十七世紀オランダの国民的詩人ヤーコプ・カッツの著書『結婚』はそうした考えを最もはっきり打ち出した著作と言っていいだろう。結婚を控えた若い娘たち、その親たちに向けて書かれたこの作法書には、女性のあるべき姿が年齢を追って記されているが、そうした人生の諸段階のそもそもの始まりということで、「子どもの遊び」なる一文が序論に配されている[9]。

6　（左上）カッツ『結婚』(1625) より

7　（左下）ブリューゲル《ネーデルラントの子どもの遊び》、1559、ウィーン、美術史美術館



8　（上）デ・フォス《幼年時代》、17世紀初め

9　（下）ボッス《幼年時代》

そこで、その序論に添えられた版画に目を向けることにしよう（図6）。真ん中を、槍を持ち、旗を掲げ、太鼓を叩き、笛を吹く子ども兵士の一団が前方に向かって行進する。さしずめ兵隊さんゴッコといったところだ。画面左手前には、人形ゴッコ、おままごとをする女の子たちが配されている。その後方には、鞭独楽回し、シャボン玉、膀胱風船、鳥遊び、風車、輪回し、逆立ち、凧揚げをする男の子、そして右手前には、目隠し遊びをする男女、その後ろには馬飛び、棒馬ゴッコ、縄跳び、竹馬遊びをする男の子の姿が見える。

遊びを網羅的に描くというこの版画の構想は、かの有名なブリューゲルの作品《ネーデルラントの子どもの遊び》（図7）と共通する。ブリューゲル作品の制作意図はさまざまに議論されているが、その一つは、大人の世界の愚かしさを映し出したものという解釈である。[10] カッツの意図がその解釈とほぼ重なっていることは、画面上部のラテン語の標題、「ささいなことから重要なことが」に明らかである。子どもの遊び（ささいなこと）には大人の世界（重要なこと）が透けて見えるのだ。

図版に関連する序論部分で、カッツは一つひとつの遊びがどのような大人の世界を示唆するかを解説している。目隠し遊びは、成長して後のつかまえどころのない恋を予示する。目隠し遊びだけが男女混合で描かれているのは故ないことではないのだ。人形ゴッコは女児が将来に担うべき家庭人としての徳を、そして兵隊ゴッコは男児が将来進むべき国にかかわる仕事を印象づける。遊びにもジェンダー的な差があり、それはとりもなおさず男女の社会的な役割分担の意識の反映であった。鞭独楽回しは勤勉さに関連する。鞭を惜しめば独楽がとまるように、勤勉さを忘れれば人は欲望におぼれるというわけだ。シャボン玉はよく知られたこの世のはかなさのしるしである。膀胱風船は、牛にはいろいろと有用なところがあるのに、もっぱら自分の楽しみのために役にも立たないもの（膀胱）をほしがる愚かさを示す。凧揚げは、高く揚がっても、紐が切れれば落ちて、単に汚れた紙になってしまうところから、満足を知らない高慢の罪と関

連する。輪回しは、ぐるぐる同じ場所を回り続け、進歩もなければどこにも出口のない状態と対比される。棒馬遊びも、単なる木を馬と幻想するので、高慢へと行き着く。そして、これら無意味な遊びはすべて大人自身の愚かしい所業と重なる、世界なんて児戯に等しい、とカッツは言うのである。

とはいえ、子どもの遊びを肯定的にとらえる見方が十七世紀オランダに全くなかったというわけではない。マールテン・デ・フォスの子どもの遊びを主題にした版画（図8）はその典型的な一例となろう。独楽回し、輪回し、馬乗り、目隠し遊び、竹馬などに興ずる子どもたちを描いて幼年時代を表すこの版画には、「十歳が私たちの歳の数。だから私たちのすることは馬鹿みたいに見えるでしょう。でも私たちの目には楽しいもの。互いに手を打ち、棒を引っ張り、独楽を回し、身体の上を飛び、輪を回したり。皆、子どもの大騒ぎ」という銘文が添えられている。[11] 子どもと遊びの世界が不可分であること、子どもたちにとって遊びがこの上なく楽しいものであることが子どもの口を借りて強調されている。

詩人のフォンデルは、一六三三年、幼い娘のサラの死を悼み、「跳びはね」、「縄跳びをし」、「ふざけて踊り」、「騒がしい連中を引き連れて輪遊びに興ずる」姿を懐かしむ詩を詠んでいる。そして人形ゴッコに興ずるサラには、大人にはない楽しみがあったとも語る。詩人は、遊びと年端の行かぬ子の愛らしさ、屈託のなさとを不可分のものと考えているのである。[12]

アーブラハム・ボッスが原画を描いた《幼年時代》（図9）からも子どもの遊びに対する同じような見方が窺える。骨お手玉、風車で遊ぶ子ども、お医者さんゴッコ、お人形さんゴッコに興じる子どもを描いたこの版画の下部には、「子ども時代のゴッコ遊びはこの世の営みのまねごと。でも、彼らほどその営みに煩いなく携われる者はない」という銘文が見える。対比されているのは、ここでも、煩いなき子どもの遊びの世界と大人のつらい日常生活である。子どもの遊びは、無垢のしるしで

あり、大人の重荷に満ちた世界の対極にあると見なされている。

著述家たちの間からも、世紀半ばごろから、遊びを肯定する声が上がってくるようになる。たとえばオランダで生涯を閉じたチェコの教育学者コメニウスは「二、三、四歳児の子どもの心ははずんでいる。彼らの心は遊びで活性化される。子ども同士で遊んだり、走り回ったり、追いかけっこをしたり、音楽や絵を楽しんだり。何であろうと楽しく気持ちのいいものは子どもにやらしてやろう」と書いている。[13] 遊びには、身体を頑強にしたり、心を浮き立たせる教育的効果があるというのだ。遊びに心と身体をリフレッシュする力があることはすでにプラトン、アリストテレスあたりから強調されていたが、その効用が、ここにきて、とくに子どもとの関連で説かれるようになったのだ。

十七世紀オランダでは、子どもの遊びは、子どもを堕落させる無意味な所業として、あるいは大人たちの愚かさの鏡像として、否定的に捉えられることが圧倒的に多かった。しかし、その一方で、子どもの遊びを容認する画像や発言も、ほんのわずかだが、途絶えることなく続いていた。そうしたなかで、十七世紀が進むにつれて、エリシャを嘲る子どもの主題がほとんど姿を消し、イエスに愛される幼な子のエピソードが画家の関心を引くようになるのは、おそらく、子どもと子どもの遊びに注がれるまなざしが、徐々にではあるが肯定的なものへとカーブを切り始めたことを意味しているのではないか。無用な存在から屈託なく遊ぶ無垢の存在へと、子どもの社会の中での位置づけが変わり始め、それを反映するように絵画の主題選択の意識が変わったと考えてみたいのである。本格的な「子どもの発見」にはなお十八世紀を待たねばならないにしても、いち早く市民社会を実現し教育制度を整えた十七世紀オランダには、「子どもの発見」の機がどこよりも早く熟していたのではないだろうか。

（目白大学）

註

1)十七世紀オランダの子どもの遊びに関しては、森洋子『子どもとカップルの美術史』、ＮＨＫ出版、二〇〇二年、126—133頁に啓発されることが多かった。ここに記して森氏に謝意を表したい。

2)M.F. Durantini, *Studies in the Role and Function of the Child in Seventeenth Century Dutch Painting: An Iconographical Investigation*(diss.), 1979 (UMI Dissertation Services), pp.196-197による。なお、世紀半ばごろには、学校生活は朝八時から夕方五時へと変更された。

3)Idem, pp.227-229

4)Idem, p.229

5)R. Dekker, *Childhood, Memory and Autobiography in Holland. From the Golden Age to Romanticism*, New York, 2000, p.73

6)森洋子ほか『カンヴァス世界の大画家　11巻　ブリューゲル』、中央公論社、一九八四年、77頁を参照されたい。

7)J. B. Bedaux, 'Inleiding', in *Kinderen op hun mooist* (exh. cat.), p.20を参照されたい。

8)R. Visscher, *Sinnepoppen*, Amsterdam, 1614, Tweede Schock, XXI

9)J. Cats, *Hovwelick. Dat is Het gansch Beleyt des Echten-Staets*, Middelburug, 1625, 'kinderspel' (pp.i-iiij)

10)S. Schama, *The Embarrassment of Riches*, New York, 1987, p.498

11)森洋子ほか『カンヴァス世界の大画家　11巻　ブリューゲル』(注6)、79頁の訳を参照した。

12)E. de Jongh et al., *Mirror of Everyday Life. Genreprints in the Netherlands 1550-1700*(exh. cat.), Rijksmuseum, Amsterdam, 1997, p.93による。

13)M.F. Durantini, *Studies in the Role and Function of the Child in Seventeenth Century Dutch Painting*(註2), p.225による。

☆「子どもたちへのまなざし—十七世紀オランダ絵画を読む」シリーズは、今回で終わります。